

O3-005

長期入院児に対する aibo を用いた個別介入遊びの AI における課題

小川 悠¹、牧野 仁²、大谷 ゆい²、中村 明雄²、早川 真桜子²、野田 千尋²、田中 恭子²

¹ 国立成育医療研究センター

² 国立成育医療研究センターこころの診療部リエゾン科

【背景・目的】

慢性疾患を契機に長期入院を強いられる子どもたちにとって、日々の治療や疾患に伴う自身や家族の変化に対する不安やストレスは計り知れない。また医療的ケアの必要度から、集団遊びなど、他者とのふれあいの機会が非常に少ない。リエゾン精神医学では、認知行動療法などの効果が検証されてきたが、動物介入療法もケアの一環として臨床で行われている。しかし動物では感染症や咬傷などのリスクがあるため、それが少ないロボット介入療法に注目が集まっている。aibo を用いた小児入院患者とその介護者に対する集団介入のパイロット研究では、小児医療の現場において、aibo が集団ロボット支援療法のツールとして活用できる可能性を示唆している。その結果から介入①:医療処置前後の aibo によるディストラクション効果の検証、介入②: aibo 介入集団遊びの効果の検証、介入③: 長期入院児に対する aibo 個別介入遊びの効果、介入④: 通院する子ども・家族の aibo への期待調査を計画した。今回はその介入③の研究結果を示す。

【対象・方法】

対象: 疾患加療のため1か月以上入院中であり、不安や抑うつ、発達上の課題をもち当科に依頼のあったケース

方法: aibo 介入個別遊びを週に 30 分×2 回

【結果】

14 ケースに介入を行った。血液疾患など長期入院を要する疾患が 7 ケースと最も多く、拝啓に発達や適応の問題を抱えるケースなど様々であった。ケース提示を行う。14 歳男児。X 年 2 月に急性リンパ節白血病初発の診断で治療を終了したが、X + 1 年 3 月に再発の診断となり入院となった。頭蓋骨損傷を伴う交通事故で ICU 加療歴があり、医療行為・閉塞感に対する恐怖があり初発時より当科が介入していた。今回は再発で入院した X + 1 年 7 月から 4 週間の介入を開始した。造血幹細胞移植に伴い無菌室に転室をしたが、部屋内でも aibo と同室をした。在室中は不安の表出が目立たず、不安緩和に役立ったと考えている。

【考察】

長期入院の子どもは不安や孤独感、行動の制限など医療にまつわるトラウマを抱えるが、表出する場合は少ない。そういったストレスを抱えている子ども達が、aibo との触れ合いにより、表出するきっかけを、対人ではなく対 AI だからこそ得られる可能性がある。今回行った個別介入においても、aibo と患児、または aibo と患児と母など「aibo のいる環境」を設定することで、治療にまつわる不安の軽減につながる事が示唆された。

O3-006

NICU 病棟退院直後の母親の心的外傷後成長と自己効力感 低出生体重児を子育て中の母親との比較から

笠井 由美子¹、西田 みゆき²

¹ 川崎市立看護大学

² 順天堂大学大学院医療看護学研究科

【目的】

本研究の目的は、NICU 病棟退院直後の児をもつ母親の心的外傷後成長と自己効力感について、3 歳以上に成長した低出生体重児の母親と比較することである。

【方法】

研究対象者は、NICU 病棟退院直後の子どもをもつ母親と、3 歳以上に成長した低出生体重で出生した子どもの母親（以下: 成長した子どもの母親）で、無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、①母親の年齢、子どもの在胎週数、出生体重、医療的ケアの有無、②公的サポートや NICU 病棟を退院した親の会に所属の有無、③ PTG を測定する日本語版外傷後成長尺度 (PTGI-J) 18 項目 (0~5 点の 6 件法)、④自己効力感を測定する一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES) 16 項目とした。分析方法は、対象者の比較に Mann-Whitney U 検定、各尺度の変数間の関連は Spearman の順位相関係数を用いて分析し、統計解析には SPSS Statistics Ver.26 を使用した。本研究は研究者所属機関倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

参加者は NICU 病棟退院直後の子どもをもつ母親 7 名、成長した子どもの母親 5 名だった。NICU 病棟退院直後の子どもをもつ母親の属性は、20 歳代 2 名、30 歳代 4 名、40 歳代 1 名。第一子が 4 名、第二子が 3 名。子どもの属性は、平均在胎週数が 28.5 ± 2.6 週、平均出生体重 1294 ± 626.8 g で、500~1000g が 4 名、1000~1500g が 2 名、2000g 以上が 1 名。平均入院期間 16 ± 8.3 週、医療的ケアが必要な児は 1 名だった。成長した子どもの母親の属性は、全員が NICU 病棟を退院した親の会に所属し、子どもの現在の平均年齢は、 7.6 ± 4.9 歳、平均出生体重は、 740 ± 450.5 g だった。PTGI-J 総得点 (0~90) は、NICU 病棟退院直後の子どもをもつ母親が 50.71 ± 8.65 で、下位尺度得点の平均値では、「他者との関係」3.21、「新たな可能性」3.21、「人間としての強さ」2.36、「精神的変容および人生に対する感謝」2.29 だった。成長した子どもの母親は 67.4 ± 12.7 で有意差を認めた ($P=0.03$)。GSES 総得点 (0~16) は、NICU 病棟退院直後の子どもをもつ母親が 6.85 ± 4.48 、成長した子どもの母親は 9.2 ± 2.48 で有意差はなかった ($P = .432$)。NICU 病棟退院直後の子どもをもつ母親の PTGI-J 総得点と GSES 総得点に正の相関を示した (.893)。

【考察】

低出生体重児の母親は、子育てを積み重ねていく中で、心理的な成長をしていることが分かった。PTG と GSES が相関していたことから、退院直後も出産に関する自責や子どもの将来に関する精神的苦痛が継続していることで自己効力感が低いと推察された。よって、PTG が生起するには、時間と支援が必要であることが示唆された。